
イカレタ男女はパンツを被る。～パン、ツ！パンパパンツ！パン、ツ！パンパパンツ！～

ラグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イカレタ男女はパンツを被る。〜パン、ツ！パンパンツ！パン、ツ！パンパンツ！〜

【Nコード】

N5187T

【作者名】

ラゲ

【あらすじ】

常人とはかけ離れた主人公、藤間雅人は平々凡々な日常を送っていた。

ところがある日、謎の美少女から下着泥棒を捕まえて欲しいと頼まれたのをきっかけに、ある学園へ雅人は半強制的に転校させられることになる。

その名も、『帝都パンブラ学園』。

この学園は日々ありとあらゆる下着メーカーの争いが起きていて、

雅人はその中のパンツ派の女帝である月野ミミに気に入られてしまったのだった！

日夜行われる下着達の闘争。

雅人はミミを、無事に学園のランジェリークイーン（普通の学校で言う生徒会長）にすることができるのか！？

王道系どたばた恋愛ラブコメディここに降臨！

この小説は隔週（第一と第三週）に一回、日曜日から月曜日に更新していく予定です。

第一回戦 パンツ男VSブラ男 (前書き)

登場人物

- 藤間雅人(とうままさと) : この物語の主人公
- 月野ミミ(つきのみみ) : パンツを奪われた可愛そうな美少女
- ブラ男(?) : ミミのパンツを奪った謎の男
- まなたん : 雅人が大好きなアイドル

第一回戦 パンツ男VSブラ男

その日は、雨が、降っていた。

「はぁ……はぁ……すううう……げえ！」

鼻に詰まった血の塊が呼吸を邪魔する。必然、俺は口でしか息が
できなかった。

「げほつ、ごほ！ げえ！」

雨の雫と俺の血反吐の混合物が地面へ吐き出され、嫌だ嫌だと言
いながらも大地は混合物を地中へと吸い込んでいく。

もう何回鞭を叩かれたのかわからない程労働を強いられた肺は、
既に限界だ。呼吸という動作に肺を使わない方法が無いものか、こ
の時の俺は真剣に考えていた。

「ひゅう……ひゅううう……」

息が満足にできない、それはもちろんのことだが、目も見えない。
完全に見えないとまではいかないが、その視界を奪うには十分と
言えるほど俺の眼は腫れあがっていた。

左腕も動かない。痛みなどとうの昔に忘れ去ってしまったが、こ
れは多分捻挫なんかではすまない怪我だろうことが推測される。

足だって、がくがくだ。俺はかろうじて動く右腕と、今にも折れ
てしまいそうな程ぶるぶるしている足を軸に、地面に這いつくばっ
ている。

「がはっ……！ うえええええ！」

遂に体が耐えきれなくなつて、その場に汚いものを巻き散らかし
てしまう。

体の奥から逆流してくるその波に逆らえず、口から次々に形容し
がたいぬちゃぬちゃした物が吐き出される。

「……限界、か？」

俺の頭上からかけられた、透き通った少女の声。

雨音に負けないくらいよく通る声に対して、つい俺は声に耳を傾

ける。

「全身血まみれじゃないか。呼吸は困難だし、視界も最悪。腕も骨折してるし、足もぶるぶる。これ以上ないくらい、絶体絶命だな」
確かにその通り。

誰がどう見ようと、俺は今にも死にそうな少年にしか見えなかった。

顔を上げ、前を見据える。

激しい雨と眼の腫れのせいで、ぼやけて相手の顔なんかわかりはしない。だが、俺にはなんとなくわかる。わかる気がするんだ。

絶体絶命。

いいじゃないか絶体絶命。息ができ無かろうと、眼が見え無かろうと、腕が折れようと、歩け無かろうと。むしろ、こちらから望むところだ。

体中が悲鳴をあげようが、雄叫びをあげようが関係ない。だからこそ、だからこそ俺は

「……絶対に、勝つ！」

そう、それでいいんだ

俺の意識が完全に途切れる間際。やはりというべきか、目の前の少女は頬を真横へはち切らんばかりに広げていた。

真つ青な空、灼熱の太陽から見下されることに我慢ならなくなつたコンクリートは、じりじりと上空へその熱を反射させて反撃に出る。

勿論一番の迷惑を被るのはその板挟みになっている俺であり、近場にあるコンビ二へと足が自然と寄ってしまうのかもしれないことのように思えた。

軽快な音と共に出迎えてくれるコンビ二の中はとても涼やかで、不快とも感じるべたついた汗を爽快に吹き飛ばしてくれる。

雑誌コーナーにて、俺がいつも愛読している雑誌を手に取り、表紙を観察する。

週刊ヤングマガティン。

その表紙には、今はやりのアイドルが上目づかいで俺のような精力だけがありあまった不特定多数の青少年、いや性少年を悩殺しようとしている。

そんな表紙を見てつられてしまったのだろうか、俺こと藤間雅人（フジマタマサヒト）は思った。

「ああ、切ない……」

そうだな、俺について未だ理解が浅い奴、通称ビギナーズ藤間の皆さんにもわかりやすく今の俺の心情について説明しようか。

今現在俺はあるアイドルにどっぷりはまっている。そのアイドルは今週の表紙も独占していて、毎週のようにこのコンビニでその魅惑の彼女を見つめることが俺のルーチンワークだった。

『今週も見逃せない！！あの禁断の絶対領域に迫る、まなたん大特集！』

「まなたん……ああ、今日も可愛いよう……」

まなたんは勿論芸名であり、この子の魅力はなんといってもスカートとニーソックスのコラボレーションである、萌えの究極ともいえる絶対領域の使い方だろう。

見えるようで見えない。そんな男性を弄ぶような領域を、彼女は完全にマスターしている。あえて言うならば、見えているのに見えないのだ。

実際は見えない。しかし、あまりにもギリギリのラインを責めている為に、男の頭の中で疑似下着を連想してしまう。

今日の彼女は緑と白の縞模様のニーソックスを履いていて、そのニーソックスから覗く生足、そこからスカートまでの数センチを力メラは的確な角度で写している。

勿論、パンツなんて見えない。だけど、煩惱が溜まりに溜まっている俺の脳は見えてしまう。

そう、隠されたパンツ、シークレットパンツを！！

「まなたん、今日はしまパン何だね……俺、そう思っつて、今日はゼブラ柄のトランクス履いてきたんだ……ハア、ハア」

「やだあ、あのお兄ちゃん口からヨダレたらしてるう」

「しっ、駄目！ 見ちゃいけません！！」

「はあはあ、まなたんはあはあ」

なにやら人外の物でも見つめるかのような熱視線に身を悶えさせながら、まなたんの滑らかもっちりな太ももをあますことなく鑑賞した。

「ありがとうございますでしたー」

結局雑誌を満足いくまで食い入るように見つめていた俺の背後から、決して店員が客に言うべきではない言葉を背に受ける。そんな声に負けじと、俺は満足げな笑みを浮かべてコンビニを出た。そもそも学校の帰りにふらっと寄っただけだったのに、時間は随分と経っていたようだ。

日は傾きかけていて、先ほど感じた太陽とコンクリートの壮絶な戦いはなりを潜めていた。

「さあて、これからどうしようかなあ」

俺の行動時間としてはまだまだ暇な時間というものは余っていたが、まあ、やることやったし、今日はもうこれでいいか。

そうだ、早速自宅に帰って、撮り溜めしておいたまなたんのビデオを鑑賞することにしよう。そうと決まれば話は早い、俺はルンルン気分でここから歩いて十分程度の距離にある我が家へ歩を進めることにした。

夕焼けの温かな光が俺の姿を照らし、伸びた影を作る。

小さい頃の俺は影をもう一人の自分だと思っつて、その影がどこまで大きくなるか頑張ったもんだ。結局は学校の木の上まで登ったと

ところで、先生に怒られて逆に小さくなってしまったけれど。

影を見つめながら、そんな小さい頃の思い出を思いだした。

俺は、あの頃より大きくなれたのだろうか。

「ふん、そんなことより今はまなたんの絶対領域にハアハアするほうが肝心だっつもの」

俺はあの頃より変なところが大きくなってしまったようだ。ああ、でもしょうがないんだよ。男は常にロマンを指すものなんだ。

「あー、早く、早く見たいよ、まなたんのしまパンナーー！」

そんな、変態丸出しの雄叫びをあげた時だった。

「っい！」

「は？」

これまでは、普通の、何でもない、普段と変わらない日常のーページ、だったはずだったのに、

「っつてんでしょ！ 待ちなさい！」

俺の目の前には、

「!?!? ……つく、邪魔だ！」

ブラジャーを頭に被った、俺とタメを張れるのではないだろうかと思えるほどの変態が、

「どけ！」

突撃してきた!!

「うわっ、とぉ！」

いつもなら避けられる俺の反射神経だったが、目の前に現れたのが重度の変態だったので反応が遅れてしまった。見も知らぬ変態と衝突した俺は情けなく尻もちをついてしまう。

その図は、人生の中でも、中々上位に入ってしまうのではないかと思う程に屈辱的だった。

「すまなかった！ 怪我をしていたら後で謝るが、今は一刻を争うんだ！ ここは許してくれ！」

「あ、ああ」

おいおい、しかも謝られちゃったよ。とんだ変態だと思ったのに

意外とこの子礼儀知ってるよ。

俺とぶつかつた変態紳士はぶつかつてなお勢いを落とさずに、路地を走り抜けていく。

「ちよつとあんた!」

ああ、変態紳士つて本当にいるんだなあ。と思っていると、今度は遠くから息を荒げた声が聞こえてきた。

「ああ？ 今度は何だよ」

「追つて！ あいつ追つて!」

そいつは、指で先ほどの変態紳士を指しながら、

「あいつ下着泥棒なの!」

なんて、顔を真っ赤にしながら叫んでいる。確かに、下着泥棒ならあいつの独特な格好も頷ける。むしろ世界の下着泥棒の見本ともなるべき正装なのではなからうか。

「早く追つて！ 逃げちゃう!」

「あー……なるほど。おっけ、任せときな!」

彼女の切羽詰まった声を聞いた俺は、尻もちをついた状態から一瞬にして身を翻し、すぐさま下着泥棒を追いかけた。

え？ なんで追いかけたのかつて？

俺、可愛い女の子には弱いんだよね。

「私は後から行くわ！ 頼んだわよ!」

後ろを振り向くと、絵や漫画から出てきたのではないかというほどに非現実的な美少女が、俺を見てエールを送ってくれていた。

ちなみに、俺の持久力は人よりあるほうだと自負している。だから、あの変態紳士も捕まるのは時間の問題だと思っていた。

だが、

「はあ、はあ……っく」

「待て、待てつて! ……っくぞ、あいつ化け物か!」

変態と変態紳士の鬼ごっこは開始から一時間経ってなお行われていた。周囲は段々暗くなってきたので、そこ行く会社帰りのサラリーマン達が帰宅する姿が風景として流れていく。

「つく、はぁ……しつこい男は、嫌われるぞ！」

「ふう、はぁ……ブラジャー頭に被ってる男も、大概、嫌われると思っけどな！」

「……ふん！ 君には僕の気持なんて何もわかつちやいなんだ！」

あれ、なんか怒ってらっしゃる？ まあ確かにブラジャーを頭に被る男の気持なんてわからないけれども。いや、少しはわかるかもしれない。……男ってつくづく悲しい生き物よのお。

そうして追い詰めること一時間半。遂に俺は路地裏の行き止まりまで変態紳士を追い詰めることに成功した。

「よつやく、追い詰めたぜ……ふう」

「くそつ、まさかこの僕が、一般人に追い詰められるなんて……」
ブラジャーの位置を直しながら向かい立つ変態紳士。息を整えながら、こちらを威嚇している。

「さて、そんじゃさつさと盗んだ下着を返してもらおうか」

「く、来るな！ これ以上来ると、いくら一般人でもさすがに痛い目を見ることになるぞ」

変態紳士はスツ、と長い一物をこちらへ向け……じゃない、正確には、竹刀をこちらに向けて構えていた。

「おいおい、最近の下着泥棒は竹刀まで準備してるのかよ。ヤル気満々じゃねえか」

つーかどんだけ下着欲しかったんだよ。もうここまでくると下着の一枚や二枚あげてもいいのではないかという気にもなってくる。

まあ、でも、ここは乗りかかった船だ。俺は十分に竹刀を警戒しながら変態紳士に近づぐことにした。

ちなみに言うと、男なら一度口にしたことは最後までやり通すのが俺のポリシーだ。

「つくそ、仕方ない、少し眠っていてもらっぞ！」

変態紳士は俺が近づこうとした瞬間、驚くべき速さで俺との距離を詰め、

「胴　　！」

と叫びながら俺の腹部に竹刀を直撃させた。

「ぐほう！」

バシィ！

という重い音と共に俺の横を颯爽と通り抜る。抜き胴と思わしき技を食らった俺は、その場に腹を抱えて蹲るしかなかった。

「つつ、すまない…… 本当は僕だつてこんなことはしたくないんだ。事が済んだら絶対に謝罪はするつもりだ。だから、すまない！」

「かはつ、ぐう……」

振り向きざまに竹刀をしまい、深々と頭を下げる変態紳士。

「僕は急がなくなっちゃいけないからもう行くけど、ちゃんと、体に異常があれば病院に行ってくれ。その費用も僕が後で出す」

くそう、ことこの場面になっておきながらこいつはどんだけ紳士なんだ……。ブラジャーを頭に被っている点と、下着泥棒をしている点を除いたら惚れてしまいそうだった……。俺男だけだ。

「それでは、体に気をつけて」

変態紳士は踵を返して路地を出て行こうとした。

「待てよ」

数歩歩いたところで、変態紳士は立ち止まる。

まあ確かに、やることやって、変な変態から追いかけて、その変態も竹刀で撃退したんだから、心は満足で満ち足りていることだろ。だが、

「何？ なっ！ どうして……」

このまま帰すってんじゃ俺のプライドは許しちゃくれねえ。

腹部へのダメージは十分にある。見事な足さばきと、華麗な剣さばきから見て、有段者であることは間違いなさそうだった。

「ただ、油断してたな。」

「ほづら、変態紳士。お前が欲しがってたもん目の前にして、お前は尻尾巻いて逃げんのか？」

俺は手にふわふわのフリルがついたピンク色のパンツをひらひらさせながら、どや顔を決めていた。

「な、なんで……！」

変態紳士は自分の服を弄り、先ほどまでであったのであろう盗んだパンツが無いことを知ると、こちらに敵意を向けてきた。

「油断し過ぎなんだよ、俺を一般人と見くびり過ぎなんだよ。一般人がこの糞暑い中一時間半もノンストップで走り続けられるか？」

さつきお前が俺に胸を打ち込んで来た時、お前の服の中からこれを拝借させてもらったよ」

「な……まあ、確かに。じゃあ、一体貴様は何者なんだ！」

「俺か？ 俺はなあ」

俺は、一層格好つけるため、パンツを両手に持つと、

「変態、魔王だああああああああああ！」

一気にパンツを頭に被った！

「っへ、変態だあ！ 変態がいる！」

「なあにおう、お前だって変態だろうが！ 今更何を言うか！」

目の前を覆うピンク色の視界、無意識のうちに先ほどの美少女の顔が思い浮かぶ。

すうはあ、すうはあ。俺の持てる嗅覚を総動員させてパンツの臭いを嗅いだ。洗剤の良い匂いがした。

っち、洗濯済みかよ。

「貴様、僕を変態と蔑むか！ 不届き者め！」

「どう考えても不届き者はお前だろう！ いい加減観念しやがれ！」

夜の路地裏に、片やブラジャーを被った変態、片やパンツを被った変態が対峙していた。この世で一番見たくない光景でもある。

「ちえりゃあああ！ 面……！」

ブラ男（変態紳士から格下げした）はまたしても竹刀を振り上げ、今度は俺の面を狙ってきた。

「でりゃあああ！」

気合一闪、俺は左腕を竹刀の犠牲にして差し出す。

バシィイ！

先ほどよりも手加減していないのか、重たい、というよりも、何かが破裂したのではないかというような音が辺りに響く。だが、俺は何とかその重撃に耐えたとすかさず空いた相手の左わき腹に俺の鉄拳をぶち込んでやる！

「つく、はっ！」

それを予想していたのか、一瞬にして俺との間合いを十分に取る為にバックステップを決めると、慎重に俺の動きを観察し始めた。

「僕の一撃を食らってなお、反撃できるなんて……」

「これでも、鍛えてますんで」

まあ、実質左腕は超痛い。でもやせ我慢だ、俺は男の子だからな。

「こ、こんなパンツ被った変態なんか……！」

……ブラジャー被った変態はパンツ被った変態に対して悔しがっていた。勿論、これも親の性交なみに見たくない光景であることは事実だろう。

と、その時、

「見つけたわよ！ 下着泥棒！ 観念なさい！」

路地裏の入り口から、うら若き乙女の声があった。この声、聞きおぼえがある。先ほど聞いた美少女の声だ。

「っは！ もはやこれまで！」

ブラ男は、服の中から丸い玉を取り出すと、そのまま地面に投げつけた。

ボンッ

「御免！」

「なっ！」

「きゃっ！」

玉から勢いよくもくもくと煙が舞い上がり、その隙に乗じてブラ男は逃げてしまった。

「くっそ！ けほっ、このままじゃ私のパンツが！ パンツが！
ごほっ、けほっ」

煙で視界が閉ざされた中、ブラ男を逃すまいと彼女は手をぶんぶんさせていた。だが、闇雲に振り回された手なんてブラ男に当たるわけもなく、ブラ男の影はどんどん遠ざかってゆく……。

「だ、大丈夫だ！ パンツなら俺が奪い取ってやったぞ！」

「ほ、本当に！」

「ああ、でもすまない！ ごほっ、ブラジャーは取り逃してしまっ
た……」

「いい！ パンツさえあれば、いいよ！ ブラジャーは、元々、あ
いつのだし！」

「そ、そうか……？ なんだ、良かったあ」

「つーか、ブラ男、あいつブラ自前かよ。さすが変態紳士、凝って
るんだなあ。」

「私のパンツ、取り返してくれたの？」

「ああ、勿論。約束したしな」

ようやく煙が晴れると、彼女は満面の笑みで俺を迎えてくれた。

「は、やっぱ人助けした後は気分がいいや。なんか、心が洗われる
よね。」

「ああ、良かった……ダ！」

「だ？ それよりほら、はい。パンツ」

俺は平然とパンツを頭から脱ぐと、彼女の手を取って手渡した。

「……………え？」

「お前んちいい洗剤使ってるよね。すげえ良い匂いしたわ。俺はい
つもトツ だからさあ。なにに、洗剤何使ってるの？」

「は、……………にお、い？」

目の前の美少女は、どうしたことが、まるでこの世の果てを見て
しまったかのような顔を浮かべた。

「え、ええ、え、ええええええ、え、え？」

「おう、いや、あいつブラ被ってたからさ、あんな変態とやりあう

にはやっぱりそれ相応の礼儀つてのがあんじゃん？ だから、お前のパンツ被らして貰ったんだけど……」

他には、変態と名のつくものについてたいして敵対心を浮かべてしまったことも挙げられたが、わざわざ言う必要はないだろう。結果としてパンツも取り戻せたことだし、万事解決である。

「え、それつて、あ、あんた、あんた、まさかあんたあんあんなあんなたあんた」

「でも、まあ、俺的には脱いだ後の匂いが好きだったりして……はは」

「iiiiiiiiiiiiいやあああああああああああああああああ！
！」

ブンッ！

「ぶげらっ！」

風を豪快に切る音と共に、気付いたら俺の頭はアソ ソマソのようになんかに爽やかに飛んで行った。

正確に言うと、彼女のカモシカのようにスレンダーな足が俺の首にクリーンヒットした。見た目以上に重く鋭い一撃は俺をそのまま路地裏のゴミ箱に送り届け、見事俺が十何年か鍛え上げた体は燃えないゴミと化した。

そりゃ、見ず知らずの男子に自分のパンツ被られたら、怒るよなあ。いや、例え旧知の仲でも怒るか（笑）。

「いや！ なんで、どうして！？ なんで私のパンツをあんたなんか被つてんのよ！？」

「いや……だから、変態には変態の礼儀つてやつが……」

「いや！ いや！ いやあああああああああああ！」

ビシィ！ バシィ！

「あひん！ ら、らめ、らめえ！ そこは男の子の大事なところらのおおおおおお！」

「死ぬ！ この変態！ バカじゃないの！？ どうしてくれんのかな！ このパンツ一番のお気に入りだったのに！」

先ほど受けた竹刀なんて比にならない程の勢いで燃えないゴミを蹴り続ける美少女の猛攻は、この後俺の意識が途切れるまで約一時間程続いた……。

「俺なあ、大きくなったら、でっかい男になるんだ」

夕焼けの河原に向けて、石を投げながら俺は言う。ちやぷんちやぷんと跳ねる石は、向こう岸に辿り着くことなく四、五回跳ねると沈んでしまった。

「そうか。あそこがでかい男はもてるというからな。思う存分でかい男になるといいさ」

「ちげえよ！ そっちだってでかくなりたいけど、そこじゃねえよ！ ……俺は、約束したんだ、でっかい男になるってな」

「そうか……」

彼女も俺の真似をして、手ごろな石を掴んで投げた。チャツ、チャツ、チャツ、チャツと良いリズムを刻んで、勢いを殺すことなく向こう岸の岩まで到達した。

「……ふん、今に追いついてやるからな。見てろよ」

「そうやって意地ばつか張ってても、でかい男にはなれないぞ」
「うるせえや。っふん」

隣の彼女に負けてしまつて拗ねた俺はその日何度も石を投げたが、一回も向こう岸へ辿り着くことはなかった。

その様子を夜が更けるまで見ていた彼女は、俺の腕が疲労で上がらなくなるのを頃合いに立つと俺を見て、

「なあ、坊や。強くなりたかつたらな、」

自分の正義を、持つことだ……

なあんで、いつものように諭してくるのだった。

何やら、懐かしい夢を見ていた気がする。

「う、うー……ん」

意識が目覚める感覚、瞼の上から光が差し込んでくるのがわかる。体の奥からエネルギーが沸き起こり、やがて脳内に達し、俺が何を言わなくても、目覚めよと俺じゃない何かか語りかけてくる。

「あ、起きた？ 水差しは近くに置いたから、自由に使っ
ていいわよ」

だが、日本の男子たるもの目覚めの挨拶はきちんとしなければならぬ。起きてから十秒、これをいかに過ごすかによって今日一日を爽快に過ごせるかどうかが決まってくる。

よし、やるぞ……俺は！

「アツキヨ又ボン又ボン又ムツキヨロー！（いやあ、とても良い朝だ。小鳥も囀っているよ）」

「ぎやあああああああ！」

心地よい感触のするかけ布団を気合の一声と共に豪快に薙ぎ払う。なんで俺がこんな一目見て高級だとわかる布団に包まれているのかという疑問を考える時間は、十秒というわずかな時間の前にはあまりにも弱小な存在だった。

「はあく、死ぬも死なぬも神頼みじゃけえ、そうじゃけそうじゃけえ、頼むげ神様わし仏教、ガハハハハ！」

「な、なななななに！ どうしたの！」

よし、良いペースだ。このまま一瞬にして着衣を脱ぎ捨てながら俺のおばあちゃんが死ぬ前によく踊っていた『じゃじゃ馬ばあばあ踊り』をいつもの五倍速で十秒以内に踊りきる！

「又ツペ又ツペムジヨロジヨロー！ ダームクレストナツプンチヨ
！」

「え、これって私の所為！ やっぱりこいつ頭打ちすぎておかしくなっちゃった!?」

高速で衣服に手をかけ、次々に脱いでゆく。踊りの方も佳境を迎

え、脱衣の方も残すはゼブラ柄のトランクスのみとなった。

残り時間は後三秒……いける！

「ヒューハー！ 昇天ベイバー！！」

そして、気分が最高潮になり、締めくくりの全裸になって決めポーズをとろうとした時だった。

「やめて変態！！」

横から飛んでくるハイソックス、もといハイキック。露出した右わき腹に正確に決りこまれた相手の左足によって、哀れ俺はトランクスに手をかけたままベツトから転げ落ちた。

「うおー！ 痛てー！ 超いてー！」

「やだあ！ こんな変態を蹴って私の足汚れたりしてないかしら……」

片やベツトの下で転がりながら腹を押さえる健康男子、片や小学校の時にうんこふんづけちゃった靴の裏を見るような顔を浮かべる美少女。

朝の穏やかな時間は、ものの十秒でまれにみる混沌とした時空を出現させていた。あらやだ、なんかデジャヴ……。。

その後十分して、色々落ち着いた後（脱衣した服はちゃんと着衣した）、俺のわき腹を先ほど思いつき蹴ってくれた美少女と改めて対面した。

「ふう……なんで朝方なのにこんなに疲れなくちゃいけないのよ……」

「それはこっちのセリフだ。朝の貴重な十秒を無駄にしゃがって。今日一日爽やかに過ごせなかったらお前、どう責任とってくれるつもりだ」

「あんだ……昨日私にあれだけ蹴られて、よくそんな軽口が叩けるわね……」

随分と疲弊した様子を見せる目の前の彼女は、紛れもなく昨日下着泥棒を追いかけていた彼女だ。そうだな、書き遅れたが、まず彼女の外見から分析していこうか。

腰まで伸ばされた鮮やかなロングヘア、整った顔立ちに少し釣り上がっている瞳、腰に手を当てながらこちらを見るその姿は、威圧感と同時に、ある種の神々しさまで感じるほどだった。

「ふう……まあ、いいわ」

髪を手で櫛流す。朝シャワーでも浴びたのか、桃のような果実のふんわりとした匂いが俺の鼻孔を刺激した。

「で、あんた。早速だけど、色々聞かせてもらおうよ」

「……？ 何をだ？」

「……っ！？ な、何をつて！ 決まってるでしょ！ 昨日なんてあんなことをしたかよ！ 下着泥棒を追って捕まえてくれるならまだしも、なんで追う側のあんたが私のパンツ被ったのよ！！」

「まあまあ、そんなに息を荒げなくてもいいだろ。パンツを被った理由なんて、さつきも言っただじゃないか。あれは、相手に敬意を表した結果の行動で」

「ムカツ！ ムカムカムカツ！ 何よその態度！ 人のパンツ被つといてさも自分は悪くないみたいない方！ こんなにムカついたのは幼稚園のお遊戯で隣の女の子が『あなた、大人で上品そうに見えるても意外にムツツリなのね、ふん』って鼻で笑われた時以来だわ！ それ以降、私の幼稚園の時のあだ名は『ムツツリー二』よ！

つて誰がムツツリー二よ！ いつ私がイタリアとドイツを統治していたファシスタ党の独裁者になっただっていうのよ！？」

「見事なノリ突っ込みを自在に駆使しているとどこも悪いんだけど、それじゃあもはや論点がどこにいつてんだかわからな……」

「うるちやい！」

「は、はい！ すみませんっした！」

突如出てきた赤ちゃん言葉に俺の理性は一瞬吹っ飛んでしまい、ついつい口から謝罪の言葉が出てきてしまった。つて、なんで赤ちゃん言葉？

「違っの……私は、ムツツリ、なんかじゃ……ああ……」

彼女はよほど掘り返したくない過去を掘り返してしまった（自業

自得だけど)のがシヨツクなのか、よよよと頭を押さえながらうん喰っている。女性のこんな姿を見せられたら、紳士代表である俺としては慰めないわけにはいくまい。

「大丈夫、幼稚園の時と違って、お前はもう立派な淫乱雌ど……」

「うるちやいうるちやい!!」

「すみませんごめんなさいぼくがわるかったですもうにとどいいません!」

こんなやりとりが数回続いた後、俺たちはようやく落ち着きを取り戻して話し合うことにした。

「まあ、確かに、知らない女の子のパンツを了承も得ずに被ったのは俺も常識しらずなところがあつたかもしれない。すまなかつた」とりあえず腰を七十度ぐらい曲げて、形式だけ謝罪する。

「そう。それ、それよ。つたく、最初からそうやって、まず謝るところから始めなさいよ……」

まだ名前も聞いていない見知らぬ彼女は息を整えながら俺を見た。「さて、謝罪も済んだし、まずは最初の質問からいくわね。あなた、小さい頃から何か格闘技でもやっているのかしら?」

「は?」

「は? じゃないわよ。格闘技よ格闘技。ボクシングでも空手でもなんでも、なんかやってなかつたの? じゃなかつたら、いくらなんでも私の蹴りをあそこまで喰らって今こうして平気そうな顔なんのできるはずないもんね」

「いや、そうじゃなくて……」

「何よ、答えられないっていうの?」

「いや違う! 何、お前、謝罪つてあれだけでいいの?」

あんなもの形式だけだつたので、てつきりもつと罵倒されてしかるべきだと思っていた。だが、目の前の美少女は、

「なんでよ。私に対して頭を下げたつてことは、謝つたんでしょ? だったら、許してあげるのが大人つてものじゃない」

そう言つて、俺に対してにこつと笑つた。

女神だ……ここに女神がいる……！

正直めんどくさい女に絡まれてしまったと事ここに至って思っていた俺だったが、なんて優しい女性なんだ……。昨今の女性は気が強い性格の人の方が多いこの世の中で、一輪の健気な花を見つけた気分になる。

「で？ あんた、話を戻すけど、格闘技とかやってたの？」

向日葵のような笑顔から一転、真剣な顔を浮かべて質問を再開する。俺のあんな変態的暴挙に対して笑顔で許してくれるような心美しき女性とあらば、俺も真剣に質問に対しての答えを返すことにした。

「格闘技か……まあ、やってたっちゃあやってたかなあ」

「なによ、その答え。あるの？ ないの？ どっち？」

「いや、道場とかに行つて何か習い事をやったつていうことはないんだ。ただ……」

「ただ？」

「俺には一人姉がいてさ、その人が師匠になって毎日格闘技紛いのことを習つてた時期ならある」

「ふうん……、その姉は、何か格闘技をやっていたつてことなのね？」

「まあ、そういうことになるかな……」

「何よ？ その曖昧な回答は？」

「いや、姉つて言つても義理の姉だからさ、正確には何の格闘技をやつていたかわからないんだ。それに、もう、今姉とは連絡が取れないしな……」

「え？ それつてどういう……」

「事故に、あつたんだ」

「あつ……」

その先の物語を予測してしまったのか、彼女は口を噤んだ。

強く、優しく、美しく、何より自分の正義を疑わない揺るぎなく強い心が備わつた、俺の姉。

幼少期から姉に鍛えられて育った俺だったが、三年前のある事故を境に姉は一切体の自由が利かない体になってしまった。いわゆる植物状態というやつだ。

今でも週に一回はお見舞いに行っているが、未だ三年前のあの頃のまま、回復する兆しはない。

俺がそのことを伝えたら、彼女は親身になって聞いてくれた後、ごめんなさい、と言って謝罪した。

「いや、いいんだ。もう三年前の話だしな。それに、もしかしたら今目覚めてくれるかもしれないんだ。まだまだ悲観するようなことじゃないさ」

「そうなの……じゃあ、あなた今家族と呼べるような人はいないってこと？」

「まあ、そうなるかな……っつか、この質問ってなんか関係あんの？」

「そうなんだ、なら都合がいいわ……それに、関係なら大ありよ！」

「は？」

見ず知らずの男の格闘履歴と家族構成を知って、なんの得があるというのか。俺はぼかんとしたアホ面で彼女を見つめることしかできなかつた。

だが、彼女はさしてそれを気にすることもなく、俺にびしっと人差し指を向けると、

「月野ミミが命ずるわ！ 今日をもって、あんたは私の忠実な奴隷になるのよ！」

と、堂々と胸を張って宣言するのだった。

「あーやだ、胸はそんなに……」

「うるちゃいうるちゃいうるちゃい！」

「はいごめんなさいぼくがすべてわるいでもういいません」

今日三度目の赤ちゃん言葉。っーか、どういうことよ、これ？

この時の俺は、これから波乱の学園生活の幕が明けることも知らずに、顔を真っ赤にしながら両手をぶんぶん回して抗議する彼女を

見て、呑気に頬を緩めることしかできなかった。

第二回戦 ガーターベル女に包まれて (前書き)

登場人物

藤間雅人(とうまさと) : この物語の主人公。変態

月野ミミ(つきのみみ) : 月野家の一人娘でお嬢様。属性『パンツ』

弓坂葵(ゆみさかあおい) : 月野家に仕えるメイド。属性『ガーター』

ーベルト』

まなたん : 雅人が大好きなアイドル

第二回戦 ガーターベル女に包まれて

「ふう、これでいいかな」

大方の荷物をまとめ終え、額から流れる汗を袖で拭う。

大方の荷物といつても、引越し先の部屋には生活に必要な物がほとんど揃っているので、段ボール箱で四箱ぐらいの荷物で収まった。

「それにしても、ここもお別れかあ。出会いはいつも突然だけど、別れる時もいつも突然に来るものなんだな」

しみじみとした面持ちで、この、長年使っていた俺の部屋を見渡す。姉と一緒に住んでから早八年になるこのアパート。

まなさんのDVDや、昔やったきり飽きてしまったギター。学校のやつらとふざけて作った手製のパンチングマシン等の、たくさんのお思い出が詰まったこの部屋とも、しばしの間お別れだ。

「いや、DVDだけは持って行くか」

洋服やひげ剃り、整髪剤などの日常に必要なものをあらかじめ詰めた段ボール箱の小さなスペースに、DVDを押しこむ。やっぱりこれがないと調子でないもんな。

「うし、完了」

さて……ひと段落がついたところで、俺は何故今引越しの準備をしているのか、その回想を思い出すことにした。ことの始まりは、下着泥棒から下着を奪い返した俺を介抱した美少女、月野ミミが『月野ミミが命ずるわ！ 今日をもって、あんたは私の忠実な奴隷になるのよ！』

と、発した言葉のせいだった。

「奴隷、ねえ……」

詳しく話を聞けば、奴隷というよりも、昨日あった下着泥棒等の被害から守って欲しい。というような、ガードマンのようなことを依頼したかったらしい。だからって、真っ先に奴隷という言葉と思

いつくのもどうかと思うが……。

当然俺は断ったさ。そりゃもう、壊れた玩具のように、涎がそこらじゅうに飛び散るのも構わず首を横に振り回したさ。

でも、あいつの卑怯極まりない残酷な脅しの数々に、遂に俺は屈してしまっただ。

そう、その世にも恐ろしい出来事は、つい昨日のことだった……。

「やだやだやだやだやだ！」

月野が奴隷勧告を出した後のこと、俺が唾液を撒き散らしながら首を振って抗議すると、

「あー、そう、へえ、そういうこと言っちゃうんだあ。ふーん。いいわ、そこまで言うならこちらにも考えがあるもの。葵！^{あおい} 例の物持ってきてくれる？」

そう言いながら手を叩いて誰かを呼んだ月野。

十秒もしないうちにノックをする音が聞こえ、扉の向こうからテレビで見えたことないような本格的なメイド服に包まれた、可愛らしいメイドさんが現われた。

「つか、見た目からして俺と同じ年ぐらいなんだけど。そんなんでメイド服とかやばすぎるんですけど！」

「……入る」

葵と呼ばれたメイドさんは、俺と月野に向かってちょこんとお辞儀をすると、

「はい」

と言って、小型のDVDプレイヤーとテレビが合体した、いわゆるポータブルDVDプレイヤーを月野に手渡した。

「ご苦労ね、葵。下がっていいわよ」

「うん……じゃあ」

手渡す物を手渡して満足したのか、メイドさんは来た時と同様ち

よごとと一礼すると部屋から出て行った。

「か、かわうい……」

「でしょ？ も、あの子をもふもふすると、すごい気持ちいいのよ！ ……あ！ あの子は私専属のメイドなんだからね、あげないんだから！」

「つも、もふもふだと！？ なんだその男心をくすぐる萌えワードは！ 俺もしたい、したいぞお！」

「ふっふーん。それはあたし限定プランになりまーす。残念でしたー」

ぐぬぬぬ。悔しい、悔しいです隊長！

この悔しさを紛らわすために、俺は月野が持っているポータブルDVDプレイヤーについて質問することにした。

「なんだ、それは？」

「ふふふ……これはね、あなたの昨日からの行動を逐一盗撮していたビデオよ。ほら、あそこに監視カメラがあるの、見えるでしょ？」

月野が指を指した先、そこには素直に何の装飾も施されていない、『THE監視カメラ』が我が者顔で取りつけられている。

つてえ！

「な！ なんであんなところに監視カメラが！？」

くそう、全然気付かなかったぜ！ つーかまぬけすぎるだろ俺！

「万ーあんたが私に暴力を働いたり、この部屋の物を盗られたりしないための、最低限の予防よ。それに、ほら、見てみなさい、今朝のあなたを」

DVDを挿入し、再生のボタンを押す。映し出された画面では、俺の安らかな眠りが映されていた。

「普通じゃないか。ただ、美男子の私生活を盗撮しておかずにしようとしている、欲求不満のOLが撮ったような映像なのが至極残念だが」

「だから私はむっつりじゃないってんでしょ！ 狩るわよ！」

「剥ぎ取られる！？」

「いいから、私が見せたいのはここからなんだから。よく見てなさい」

動きのない映像がしばらく続くと、俺の部屋のドアが開き、月野が水差しを持って入ってきた。

そして、ことが起こったのは、その水差しを俺の枕元に静かに置いて、部屋から出て行こうとした時だった。

「う、うー……ん」

「あ、起きた？ 水差しは近くに置いたから、自由に使っいいわよ」

「アツキヨ又ボン又ボン又ムツキヨローー！」

「ぎやああああああ！」

「はあく、死ぬも死なぬも神頼みじゃけえ、そうじゃけそうじゃけえ、頼むげ神様わし仏教、ガハハハハ！」

「な、ななななに！ どうしたの！」

「又ツペ又ツペムジヨロジヨロー！ ダームクレストナツプンチヨ！」

「……………」

「どう？ この映像を出すところに出せば、あんたみたいに社会的立場の低い一般人なんて一撃なんだから」

「……………え？ きよ、脅迫デスカ？」

「どつちがよ！ 私は生まれてこの方『ぎやあああああああ！』なんて悲鳴、出したことなんて無かったのよ！」

「え、じゃあ、俺がお前の初めてを奪ったって……………」

「ぎやあああああああ！ やめて！ そんな薄気味悪い話しないで……！」

「めっっちゃ容易く悲鳴あげてますやん……………」

「うるっちゃん……………い……！」

後で聞いたことなのだが、月野（様付けは嫌だというので呼び捨て）は俺が眠っている間に鞆の中身を調べ、俺の名前が藤間雅人ということやその身分と、学校での俺の評判を調べていたらしい。

だから、あんなに俺を引き抜きたかつたわけだ。多少抜けているように見えて、実は切れ者だったってわけだ。あいつの悪魔じみた策略によって、まんまと俺は月野の忠実な奴隷になってしまった。

そして、今日に至る。

先程今まで在籍していた学校が迅速に何事もなく退学でき、只今、月野がいる学校に転校する準備を行っているところだ。

何故迅速に対応してくれたのか。

それは、退学のする旨を皆に伝えた際、『二年生にもなって転校かよ……』、『フーかいきなりすぎないか?』という予想道理ともいえる疑問の嵐を、俺が一言『いやあ。ちよっと、月野家の世話になることになっちゃって』と呟いただけで、

「退学おめでとつと藤間！ ささっ、月野家の人達をまたしちやいけない！ 早く家帰って準備しろ！」

だの、

「ミミ様の新作のパンツ凄い履き心地が良くていつも愛用しています！ って言つといて藤間。俺男だけど」

とか、

「うほっ！ ブルブル！ アッー！ アッー！」

……いや、これは関係ないか。

とにかく、月野家の名前を出した途端に皆の態度が豹変して、教師やクラスメイト皆から背中を突き飛ばされるようにして俺は学校を退学したのだった。

さっき調べてわかったことだが、月野家は『ランジェリーショツプMOON』として、全国的に展開している下着屋の中でもかなり有名な部類に入る、いわゆる大企業といわれるやつで、相当な資産を持ち、月野はその社長の一人娘として結構な有名人らしい。

なんでも若い女性なら知らない人はいないんだとか。

それがわかるとなるほど納得、だから皆、やけに態度がよそよそしかったわけだ。

唯一、『あいつ』だけは、納得がいかないなんて言って最後まで反対してくれたんだけどな。結局あいつとは勝負が着かないままだったし。

「くそう、皆。いいやつらだったぜ……」

頬筋をキラリと光りながら伝う水滴になるべく疑問を持たないようにして、四箱の段ボールを積み上げる。

「まずは荷台を取ってくるか……」

幸いにも、家から月野の家までは徒歩で三十分ぐらいだった。こんなに近くに大企業の娘がいることなんて、つい昨日まで知らなかったというのだから俺も結構抜けている。まあ、そんなこと、一般人である俺が知っていても意味のない情報なんだろうけどな、この前みたいな例外がない限り。

そんなことを思いながら、荷台を取りに行くため玄関のドアを開けた。すると、その先には

「……とーま。迎えに来た」

なんて言っつて、見覚えのある美少女メイドがちょこんと立っていた。そのメイドは、昨日見たあの萌え萌えメイドだった。

「あ、お前は！」

「みみの命令で、今日からとーま専属のメイドになる。名前は弓坂ゆみさか葵あおいと呼んでくれ、よろしく」

ニヒルな笑みを浮かべながら、親指をグツ！ と立てて、挨拶をする。ぽよぽよした見た目に反して、ニヒルな笑みを浮かべる様子は愛らしくて、今にももふもふしちやいそうになる。

だが、ここは我慢だ。これはもしかしたらドツキりなのかもしれない。俺の美貌に目が眩んだ美少女達が仕組んだドツキりで、散々弄んだ拳句ポイして学校中退して路頭にさまよった末の俺にドツキリの看板を掲げて皆で高笑いする可能性は捨てきれない。

冷静だ。こういつ時こそ冷静に対処するんだ。だって、内容はど

ヒルな笑みを浮かべて親指を立てるのだった。

『月野』と堂々と掲げられた表札を抜けると、そこには俗っぽくはないが、洒落たプレーリースタイルの家が俺を迎えてくれた。四角い石タイルが敷き詰められた玄関ポーチの上を、俺が押し進める台車ががらごろがらごろという音を立てながら進んでいく。

天然の木を使っているのではないかと思わせる重厚感と上質感を感じさせるドアを前にして、改めて思う。

「ここが、月野の家なのだ、と。」

別に、ドラマやアニメで見かけるような規格外にでかい家（もはや屋敷）ではない。だが、庭の清潔感や、目の前のドアを見てわかるように、やはり月野は金持ちなんだなあということは無意識のうちに意識してしまう。

「ドアの前に来たところで、葵はこちらを振り向いて、

「とーまは、少し待つといい」

先に家の中に入る。多分、月野を呼んでいるのだろう。しばらくするとドアが開いて中から月野が現われた。

「早かったわね雅人。さあ、入って入って」

「お、おう。これからよろしく頼むぜ」

かくして、俺の夢にまで見ることになる憧れの奴隷生活が、始まるのだった。

「じゃあ、ここがあんたの部屋になるから」

そう言われて、案内された部屋。そこは、誰がどう見ても犬小屋だった。

「犬小屋ーーーーー！ めっちゃ犬小屋ーーーーー！ さすが奴隷！

テンション上がったきたー！ フー！ フー！

「何言ってるの。メートル四方のゲージ、床はトイレシート完備暇つぶしに骨の玩具もあるし、常に水は張ってあるし、ご飯も定期的にあげるわよ」

どこに不満があるのかしら？ とでも言いたげな顔でこちらを見つめる月野。

いやいや、これに何の不満もなく住める人ってよほど特殊な趣味をお持ちの人か、特殊な経歴の人しかいないと思うんですけど。

「あー、この前、俺が寝ていた部屋って……」

「ああ、あれは葵の部屋よ。あんたが気絶したから、葵はこの前ここで一晩明かしたんだから」

「ごめんよ葵ー！ー！ なんかすんごくごめんよー！ー！」

「とーま、大丈夫。住めば都」

くそう。葵は一晩とはいえ犬小屋に住まされて、拳句の果てには今まで仕えていたお嬢様の代わりに変態の身の回りの世話までさせられることになってるってのに、俺のこの傲慢さはなんだ。

いいじゃないか犬小屋。こんなに可愛い美少女やメイドと一緒に暮らせるだけでも一生味わえない幸運なんだ。そう見ると、このゲージもなんか可愛らしい造形をしているじゃないか。

ようし！ お兄さん今日から犬小屋ライフ満喫しちゃうぞう！

「っていうのは冗談で、本当の部屋は……」

「わんわんっ！ わおーん！（やったぜ！ 今日からここが俺の部屋だ！）」

「きゃあ！」

俺は犬だ！ 遊牧民と共に平原を駆け抜ける一陣の風だ！ 純情な心を持った少年と絵画を見ながら人生を共に終える忠犬だ！

床に四つん這いになって、口から涎を垂らし、架空の尻尾をイメージしながらお尻を振りまくる。勿論視線は月野のスカートの下だ。「くうーん！ くくくくうーん！（ご主人！ パンツが見たいわん

！）」

「おお、とーまが犬化している。しかしすごい邪な鳴き声」

「じよ、冗談だったのにい！ 葵、あんたがこんなジョーク思いついたんだから、あんたがなんとかしなさいよ！」

「……ふむ、しょうがない」

葵はおもむろにスカートの中に手を突っ込んだ！

「わふっ！ わふうわふう！（いいぞ！ あとちよつとで見える！）

」

「な、何やってんの!?!」

「てっれてれてれれー わうりんがるー」

どこか懐かしいアニメをイメージさせる音と共にスカートの中から出てきたのは、テレビとかでよく見る犬の言葉を翻訳する機械だった。

可愛らしいプリントが目立つわうりんがるを手にし、音声を拾うマイク部分を俺に向けてニヤリと笑ったかと思うと、おもむろにスイッチを押して、

「発射」

発射した！ 何故かマイク部分からサイケデリックな七色の光線が放たれ、俺を余すところなく包みこんでゆく。

「あばばばばばばー！」

「これで、よし」

「何？ こいつ、どうなったの？」

「パンツ！ パンツパンツ！（わう！ わわうわう！）」

俺の体からぼう、と光が放出されている。これだけでも奇妙な体験なのに、

「パンツ見せる！（わおーん!）」

「あんた、本心だだ漏れてるわよ……」

「これが、このわうりんがるの効果」

なんと、俺の本心がだだ漏れになってしまふという奇妙キテレツなことが起こってしまったのだ！

「生足！ ガーターベルト！（なんてこったい！ これじゃあ迂闊

に物事を考えらんないぜ！」

「はあ……葵、戻してやんなさい」

「わかった」

「もふもふ！（俺の深層心理を読み取るなんて！）」

「あんた四六時中そんなこと考えてて、よく飽きないわね……」

しばらくすると光が収まって、俺の体も元に戻り、本音がでることもなくなっただけ。

「ここが、これからとーまの部屋になる」

「おおっ！……って、割と普通」

あれから本当の部屋に案内してもらえることになり、ミミは用事があるからと、葵がここまで案内してくれた。

俺が割り当てられた部屋は、二階の階段上がって右手一番奥の部屋。ミミの部屋は二階から上がって左手すぐの部屋と、寝室用隣の隣の部屋を使っていて、メイドの葵は階段上がって右手すぐの部屋にあるらしい。両親の部屋は一階にあるらしいのだが、今会社が想像を絶する程忙しく、年に一度も帰ってこないらしい。

そんな環境で俺みたいな変人を奴隷として雇うとは、月野も随分変なやつである。

ちなみに、このメイドは葵一人で取り持っているらしい。なんでも彼女を一人雇うことは、メイドを五人雇うよりも効率がいいと言われるほど優秀なメイドなんだそうだ。

「この部屋に限り、とーまの所持品は好きに置いてもらって構わない。棚や机も好きに使っていい」

がらんどうの本棚に教科書の無い勉強机、極めて質素な白のベツトと、改めて案内された部屋は、先程の犬小屋と比べて遥かに普通の部屋だった。

「夕食は七時、朝は六時起床。それと、はいこれ」

茫然と部屋の前に立ち尽くす俺の手に、ぼんと渡された一個の携帯電話。これもあまり装飾はされてない、一般的な携帯電話だ。

「これが鳴ったら三コール以内に出ること。これはみみと私の携帯としか通信できないようになってるから、自分用の携帯は別で持つように」

「ああ、なるほど。緊急用ってやつね」

多分、俺はこの先壮絶な危険に巻き込まれることになる。あの変態ブラ男ともいわずれまた決着をつけなくてはならないだろう。

正々堂々の一騎打ちなら何も問題はないが、例えば、相手が卑怯者だったりする時は、戦う本人ではなく、依頼主か、その身の回りの人物が直接狙われることになったりする。そんな時に迅速な連絡がでなかつたらお話にならないのだ。

「いや、主な使用内容は庭の掃除をしてもらったり、特売の卵を買いに行ってもらったりだ。後は、たまにみみの体をマッサージしてもらったりとか」

「使いつぱしり、ホウ！ 奴隷ライフ、ツホウ！」

ホウ、ホウツ！ でも可愛い子の奴隷とかなんか興奮するホウ！

頭からつま先まで月野色って感じツホウ！

電車内で大便を催した時並に腰に力を入れて、お尻をスナップ利かせて左右にプリプリさせる。頭の中では勿論スタイル抜群の黒人女性が踊り弾けるブラジルのサンバカーニバルが展開されている。何故こんなことをしているかだって？ んなもん知ってたら、今頃俺は常識人だつっーの。

「明日から私達の通う学校に転校するから、その準備を今日するといい」

「ホウツホウ！」

「これで以上。質問は？」

「ホウツ！ ホホホウツ！」

両手は天に掲げて円を描くように、緩やかかつ大胆にスナップ。

お尻はその振り子が約百五十度になるように、勢いよく左右にスナ

ツプ。視線はあくまで上を見据え、奴隷がなんぼのもんじゃいと、理不尽な世の中に向けてスナツプ。

「……………」

「ホホホホホホウツ！」

「ていつ」

「ウツホー……！」

スナツプを利かせたお尻の、丁度振れ幅がマックスに到達したらイン、そこを的確に狙って、葵は先程から手に持っていたわうりんがるのマイク部分を俺の尻穴に挿した！

そしてニヤリといつもの笑みを浮かべると、そつと手をスイッチに伸ばして……

「つて！ ま、まさかお前……いくらなんでも、それは人としてやっちゃいけな」

「発射」

「アツ……！」

まさに外道、人道外れた悪魔の所業！ 神を裏切り化け物を贄とし悪魔を殺し、鬼を肴に生き血を啜る！ まさに、そんな、しよぎようおおおおおおお！

「とーま、人の話を真剣に聞かないからそついうことになる」

「七色のひかりが！ ななじょくのびかりかぼくのあなぼ……おおおおおおおお！！」

十分後

「あぁん……、危うくクセになるところだったぜ」

途中、お尻から入った七色の光が口から出てきた時はもう駄目だと思ったが、案外人間の体つてのは頑丈にできてる。ようやくお尻の感覚も薄らいできた。

「話を戻すけど、質問はあるか？」

お尻を撫でさせる俺に興味の一欠片もないのか、実に淡々とした

口調で会話を続ける。

「質問がないなら、私は部屋の掃除に戻らせてもらおう」
そういつて、踵を返して俺の部屋から出て行くとする葵。やはりメイドらしく、やることを終えたらすぐに自分の仕事に戻るつもりなのだろう。

……だが、お前は後一つだけやり残した仕事があるのを忘れてるぜ！

「あ、あります隊長！」

「むっ？」

「……も、もふもふさせてくださいー！！」

もふもふシチュエーション

仕事帰りのサラリーマン

「君い、この会社に入って何年目だね？」

「は、今年で十年になります……」

「十年、か。一昨年入った月野君なんか、もう君よりいい業績をあげているというのにねえ。まったく、君の取り柄は毎日会社に出席することだけだな」

ぱしん、と俺が一か月かけてとった顧客の冊子を放り投げられる。これが札束の音だったらなんと景気のいいことか、上司はため息交じりに俺を見下した。

……つくそ、俺だって、家族の為に必死に働いてるんだ。なのに、この脂ぎった髭面の上司は俺の苦悩なんか知らずに、書類上の結果だけを見て、まるで俺の神経を逆なでする為だけに生まれてきたかのように俺を攻め立てる。つくそ、つくそ！

「こんなんじゃない、君には似合わない美人のかみさんも泣くだろう。藤間君、君、お金に困ったら私に相談するといい。なんだったら、君のかみさん、俺が引き取ってやってもいぞ。わはは」

「ははは……それは勘弁してくださいよ。俺もあいつだけが生きがいで頑張ってるんですから」

いつか、あんたより出世して、絶対に見返してやる。そんなことを思いながら五年が過ぎ、七年が過ぎ、今年が過ぎようとしていた。

「ったくよお、人生つてつれえなあ」

上司にこっぴどく怒られ、残業という名のサービス業務を淡々とこなし、精神も体力も使い果たした後の帰り道。学生の頃は輝かしく思っていた大人の生活だったが、現実を噛みしめて地面を踏みしめる。

「でも、絶対に諦めないぜ。あいつの為にも頑張らなくちゃ」

こんな俺だが、人よりも幸せなことがある。それは、立派な妻を持っていることだ。大学時代に知り合ってから、お互いに清純な交際を務めて五年後に結婚した、最愛の妻。

大学の頃から色あせないその美貌は、上司も言っていた通り俺にはもったいない程で、近所でもちよっとした有名人になっている。

ストレスの溜まる日々。俺の乾いた心を潤してくれるのは、もはや彼女の『もふもふ』だけだった。

「ただいまー。帰ったぞー」

いつもより遅い帰り。メールは出しておいたのもう寝てしまっているだろうか。……いや、彼女に限ってそんなことはないか。

「あ、あなた。おかえりなさい」

俺の声に気付いたのか、リビングから妻の葵が顔を出した。俺の顔を見て顔が綻ぶ。愛らしいその顔は、それだけで一日のストレスを流してくれる気がした。

「ご飯にする？ お風呂する？ それとも、も・ふ・も・ふ？」

「……も、もふもふでお願いします！」

わたあめのようにふわりとスカートを膨らませて、ちょこんと座る葵。これが、彼女のもふもふサインなのだろう。元々身長の高い彼女が座ると、メイドという服装もあいまって、まるで精巧な作り

をしたお人形のようにだった。

「そ、それじゃあ、失礼して……」

その上から覆いかぶさるように、包み込むように、ぎゅっ、と彼女を抱く。

壊れてしまわないように優しく。しかし、十分にその感触を確かめられるぐらいには力強く抱きしめる。事前に取り決めておいた仕事帰りのサラリーマン風のシチュエーションは、既にどこかへ行ってしまった。

「お。おお！」

じんわりと伝わってくる彼女の体温。人が人を抱いた時のなんともいえない温もり。頭をすっぽりと隠すように抱きかかえると、それだけで昇天しちゃうようなほど気持ちよかった。

「ん、くう」

少し力を入れ過ぎてしまったのか、息が苦しくなった葵が俺の肩に顎を乗せる。ぽよん、と胸のあたりに柔らかいものが押しつけられた。メイド服の上からではわからなかったが、胸のボリュームは結構あるようだ。

背は小さいのに胸が大きいなんていろんな意味で反則だろう。俺は、だんだん胸の奥から催してくる劣情を押さえきれなくなってきた。

「葵ー！」

しんぼう堪らなくなってきた俺は、更なる力をこめて葵を抱きしめた。月野とは違ったシャンプーを使っているのか、葵の体から濃厚なミルクの匂いが鼻腔を蹂躞する。

「と、とーま……痛い」

「葵葵葵！ 葵ー！」

だ、だめだ！

だめだだめだと思っても、力を入れる程、ぷにぷにとグミのように弾力のある反発を返してくる葵の体は、凄い勢いで思春期の男の理性を破壊してくる。

「すうう、はああ、すうう、はああ……」

鼻をいっぱい広げて、抱きかかえた葵の匂いを嗅ぐ、嗅ぐ、嗅ぐ。匂いだけでなく、ざらざらと擦れる生地感触も堪能する。

しばらく抱き合ったためか、元から部屋の気温が高かったためかわからないが、息を吸い込む度にむせ返るような濃厚なミルクの匂いと、乙女にしか発せられない汗の甘酸っぱい匂いが俺の肺いっぱいになり、頭をこれでもかというほどにガンガンと打ちつけてくる。

服を通してわかる彼女の体を鼻で感じて、皮膚がざわざわと鳥肌立つ。

「ん、ふう……」

何も言わない葵だったが、俺の体臭を感じて耐えきれなくなったのだろう、俺と同じように桃色の唇から赤い三角の舌を覗かせながら荒い呼吸を繰り返す。

抱きしめる両手は汗ばみ、メイド服を濡らす。女の子の体はどこもかしこも柔らかいのか、背中から伝わる感触ですら俺には早すぎるほどに刺激的だった。

「だ、だめだ。もう、俺、俺……」

酸欠気味の頭では、何も考えられない。舐める、触れ、侵略しろと野獣のような本能が俺を命令してくる。

これがもふもふ。お子様の俺には早すぎた。こんなの耐えられそうにない。ほんの少ししかない理性で耐えられたのも数秒で、耐えよ耐えよと命令するも抗えず、がたがたと震える手が遂に葵のスカートの中に……

「あ、あんた達、私の家でなにやってんのよ！ 不純！ 不潔！ 死ね！」

「あぴよ！」

入る前に、この家の大魔神月野ミミに止められた。俺達の情事を見るなり飛んでくる美しい右足。

だが、正直、この時ばかりは顔に飛んできたハイソックスを笑顔

で受け止めることができたと思う。

ありがとう月野。あと一歩で踏み入れちゃいけない領域にいくところだったぜ……。

「ったく、油断も隙もないんだから。この子はこういう子だったのを、早めに教えておくべきだったかしらね……」

「我が人生に、悔いなし……、がく」

「あ、とーまが気絶しちゃった」

怒り心頭といった面持ちで、腰に手を当てながら立つ月野の凛々しい姿を目に焼き付けながら、俺は静かに意識が遠のいていくのを感じるのだった。

第二回戦 ガーターベルト女に包まれて (後書き)

この回のお話は、途中改変するかもしれない(何分急いで作ったもので……)。

ガーターベルトの魅力は追々書いていくので、今回は葵ちゃんの濃厚なミルクの匂いで我慢しといてくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5187t/>

イカレタ男女はパンツを被る。～パン、ツ！パンパパンツ！パン、ツ！パンハ

2011年6月7日03時10分発行